

2010年6月25日

針箱屋

プレスリリース

鞆・袋物・各種バッグ・製造 卸



中川満株式会社

〒668-0057 兵庫県豊岡市弥栄町1-37
電話 (0796) 23-0271(代)
FAX (0796) 24-1551

～昭和の裁縫箱～日本に唯一人残る現役職人の手作り品
どこの家庭にもあった、あの頃の姿のままに
昭和レトロ国産「ソーイングバスケット」をネットで直販

鞆・製造卸の中川満株式会社（本社：兵庫県豊岡市、社長：中川浩幸）は、日本に残る唯一の編元職人 佐藤昭治氏（同市在住）と協力し、昭和30～40年代に販売した「ソーイングバスケット」と同型の製品2型（計11種類）を2010年7月1日よりインターネットショップ「針箱屋」（楽天・Yahoo!等）にて販売致します。



昭和の時代。かつて日本中どこの家庭でもみかけたあの懐かしい形のソーイングバスケット。昭和40年代のピークの後、徐々に生産数は落ち、現在では、佐藤氏ひとりが現役の編元職人として残るのみです。同型の製品は、小売店での扱いはなく、近年では一部の通信販売でしか扱いがありませんでした。現状では継続して生産していくには厳しい状況が続いています。製品の命を絶やさない為に、今回、新たにネットショップとして製品の直接販売を展開をすることに致しました。柄・編み色などを選択可能にし、オーダーメイドにも対応。国産のソーイングバスケットの魅力を幅広い世代により広く知っていただき、製品をお客様にダイレクトにお届けできるよう準備致しました。

佐藤氏はこの道60余年の現役職人。昭和の裁縫箱の生き証人とも言える氏の手により、当時のままの姿かたちを、忠実に再現しています。

本体胴の編み素材には、昔のままの「セロ縄」を使用。撚（よ）った紙芯にセロファンを巻き、縄状に編んだひもです。ケミカルとナチュラルの合わさった、昭和レトロにふさわしい素材といえます。フタ生地には、国産高級ゴブラン織り生地を使用しており、落ち着いたグレード感が味わえます。内部透明トレイは仕切り付きで、幅は約27センチ、裁ちばさみがすっぽり納まるサイズです。本体内側は幅28×19×深さ15センチで、ハギレなどのかさばる材料もしっかり収納できます。フタ裏には、上品な赤色の生地をパールビーズで留めた、美しいフォルムのピンクッション付き。木枠を芯としたすべて手製の頑強な造りです。

「レトロ」と呼ばれる時代に生まれたこの裁縫箱。そのデザインは、「昭和」のニュアンスに満ちています。懐かしいけどアンティークじゃない。手作り品だけれども、今風のリネン・カンントリー・ナチュラルなどのセンスともちがう。

時代の成り立ちと当時の日本人の美意識が、強烈に結びついた結晶のようにも見えます。

和と洋、ケミカルとナチュラル、落ち着いたトーンとはっきりとしたビタミンカラー。あらゆるものを貪欲に取り込み、必死に生きてたあの時代を体現した「かたち」。

懐かしさの中に、そんな物語も感じて頂ければ幸いです。

■本件に関するお問い合わせ先

TEL：0796-23-0271

FAX：0796-24-1551

メール：nakagawa-man@hyper.ocn.ne.jp

中川満株式会社 担当:中川まで

ネットショップ「針箱屋」

店舗運営：中川満株式会社

代表者：中川浩幸

設立：1971年（昭和46年）10月1日

1973年（昭和48年）9月1日より法人

資本金：1000万円

業務内容：鞆・袋物・かご製造・卸

所在地・TEL・FAXは、本資料右上に記載しております。

職人 佐藤昭治氏とソーイングバスケットをめぐる状況について

(取材・文責：中川浩幸)

昭和の子 海軍少年航空兵

佐藤昭治さん（87歳）

こうのとりの郷としても知られる鞆の産地豊岡で、60余年の長きにわたり、かご・バスケットの製造に携わる現役の職人さんです。

昭和4年大阪生まれ。12歳で太平洋戦争開戦を迎えた佐藤さんは、昭和19年2月、弱冠15歳で志願兵として海軍航空隊に入隊。千葉から中国大陆の青島航空隊に配属されたのもつかの間、実戦のないまま、終戦のわずか2週間前に日本の博多航空隊に「派遣」されることになります。それからまもなくの敗戦により、軍も人も日本中が大混乱の中、命からがらたどり着いたのが、母方の田舎である現在の豊岡でした。多感な時期を戦争一色で過ごされた佐藤さんの、ここが、戦後スタートの地でした。

カゴとの出会い

その後は、移動店舗で呉服店などを営みながら生計を立てておられましたが、昭和25年頃から、現在のバスケットにつながるカゴの生産を始められたそうです。

カゴは、「杞柳細工」として豊岡では江戸時代から続く伝統の地場産業でしたので、佐藤さんがこの道に入られたきっかけもごく自然な成り行きでした。

当初は、地場で取れた柳を主な材料としていましたが、需要が拡大すると材料も不足がちになり、徐々に加工の加えやすい籐のものが増えていきました。

戦後十年が過ぎ、「もはや戦後ではない」との声が聞こえる頃から、豊岡全体が杞柳製品から工業製品である鞆の製造に徐々にシフトしていきました。生活雑貨としてのカゴもまた、手間でコストのかかる天然の素材から、供給が安定していて加工のしやすい人工のものに変わりつつありました。

ソーイングバスケットの登場

ソーイングバスケットの登場は、ちょうどそんな時期と重なります。

本体の編み素材は、セロ縄と呼ばれるセロファンを被せた紙芯を縄状に編んだもの。網目の光沢感が、いかにも「昭和レトロ」で、この素材でしか表しえない独特のニュアンスがあります。

当初はシンプルだったデザインも、形・素材・編み方等に様々な工夫が凝らされ、バリエーションも増えました。サイズも大小取り揃え、脚付きなどのグレード感のあるものまで出てきました。

佐藤さんによれば、この製品、もともとは「スウェーデンバスケット」と呼ばれるヨーロッパを起源とするデザイン。それが、中国を経て日本に入り、独自のアレンジを加えて今のような形になったものだといいます。

当初は、日本に持ち込んだ広島材料商が一手に材料を卸し、製造方法などの技術を伝えた岡山などの産地で製造されていました。やがて、大手スーパーが販売を手がけたことにより、日本中に爆発的に広まりました。杞柳産業の盛んな豊岡でもすぐに技術を持ち帰り製造を開始、販売数が増えてくると業者も一気に増えました。ピーク時には、ついには生産が追いつかず、工場の影に隠してあった不良品まで卸業者が見つけて奪い取っていく有様だったそうです。

ソーイングバスケットが売れに売れた時代。それが、日本の高度成長期、まさに昭和の熱かった時代とぴったり重なります。当時を過ごした方なら、昭和の居間のあったこのバスケットを思い出される方は多いでしょう。



「生活」から「手芸」へ、「国産」から「外国産」へ

しかしながら、昭和40年代中期を最後として、バスケットの売り上げは下降の一途をたどりました。理由のひとつには、日本人の生活の変化があげられます。年配のお客様からは、裁縫箱を「嫁入り道具に持ってきた」というお言葉をよく耳にします。かつて裁縫は、「家事」であり「仕事」でした。

何もなかった戦後から、高度経済成長を経て、物があふれ豊かになっていく日本。いつしか、裁縫は、生活と密着したものではなく、「手芸」という趣味の世界の技術に趣を変えていきました。

さらに、あらゆるものが工業製品へと置き換わるあの時代、前時代の手工業でつくられた生活雑貨は、もはや「古臭いもの」でしかなかったのかもしれませんが。

数が売れない以上、すべてを完全な手仕事によって作られる手工業品では、当然採算が合わなくなってきました。加えて、生活雑貨としてのカゴは、工賃の安い海外で作られることが当たり前になり、低価格のものが容易に手に入るようになってきました。往時は相当件数あった工場（網元）も次々に廃業していきました。

やがて、「裁縫箱」「お針箱」として戦後の日本に親しまれた「ソーイングバスケット」という製品は、一般の市場から姿を消し、人々の記憶と、ひょっとしたら物置の中だけにある過去の遺物となりました。

生きていた裁縫箱

市場からは完全に消滅したかに見えた製品は、実際には細々と作られていました。それも、たった一軒の工場。一般には流通しない閉じられた市場で、時折思い出したようにある注文でしたが、わずかながらには続いていました。当然、ほとんど採算も取れない中、佐藤さんは無理な注文にも応えて、生産を続けられました。

私（中川）が、佐藤さんと出会ったのもその頃でした。

当然、私は「無理」を伝える側の立場。こちらが心苦しくなるほどに、佐藤さんは希望に応じてくださいました。しかし、取引の条件はかつての薄利多売時代をひきずっています。せつかくの佐藤さんの手作りの品。なのに、当時の扱いでは、ひとつひとつを、大切な「もの」として送り出すなどということとは真逆の、「注文の数合わせ」の扱いしかできませんでした。

そんな気まぐれな客の注文がいつまで続くのかさえわかりません。「無理」はあくまで「無理」のままです。佐藤さんが辞めるといえば、この製品の命は途切れます。

なんとかしたいの一心で動いた結果、一部通販の世界では細々と生き延びることはできました。

それとて、客のコストに合わせるという枷（かせ）は残ります。未だに佐藤さんに正當なお返しをすることはできていません。

安い海外製品が巷にあふれる現代で、国産品としてこの製品を生き延びさせるためには、まず、職人であることを「生業（なりわい）」としていけるだけのコストが必要です。もちろん、お客様に買っていただける価格でなければ始まりません。それには「直売」の販路を獲得しなければいけませんでした。

ソーイングバスケットに宿るもの

失われてしまった日本人の「清貧」という美德。

佐藤さんのお仕事を拝見するたびそんな言葉を思い出します。

道具はもちろん、普通なら捨てるような材料をも無駄なく使う。必要以上のものを望まず、溜め込まず、最小限のごみしか出さない。それは最近の「エコ」にも似ていますが、少し違う気がします。筋の通ったシンプルな「生き方」そのもののようにも思えます。それは、日本人が昭和の時代に置き忘れていってしまったものかもしれません。

ソーイングバスケットには、そんな日本の「ものづくり」の魂が宿っています。

